

海外の話題

広西チワン族自治区での植林事業

農林中央金庫 北京駐在員事務所長 平山 勝英

この夏、王子製紙株式会社のご厚意により、広西チワン族自治区に所在する同社の植林地を視察する機会を頂いた。

同自治区は広東省の西隣、南はベトナムと国境を接する亜熱帯気候の地域で、水墨画の風景で名高い桂林市がよく知られているが、自治区としての中心都市はベトナム国境に程近い南寧市という都市である。この南寧市からベトナム国境方面に小一時間ほど車で移動した地点に今回訪問した植林地はあり、周辺には水田やサトウキビ畑、農村集落が見受けられたが、植林地域に入ると早成多収穫樹種とされるユーカリを主とした植林地が広がっていた。

同社は2002年からこの自治区で植林事業を開始しているが、これは「林紙一体化」という国策に従つたものである。つまり、パルプ原料としての森林の伐採だけを進めて土地の荒廃を招くことなく、木材の自給自足を進め国内の土地の荒廃を予防することを目的としており^(注1)、この自治区も含む年間雨量が多く温暖な気候の中国東南沿海地域が同政策の最重点地域とされていて、同社のほかインドネシア系大手製紙会社等の外資系企業も幾つかの植林地を有している^(注2)。

同社の植林地では02年からの植林事業開始後07年までの間に6,970ヘクタールの植林を実施、現時点では1年間の伐採面積と再植林面積がそれぞれ1,000ヘクタール程度で均衡するローテーションが完成されている。植林されているユーカリは近隣の国営林業試験場で1982年から栽培されているオーストラリア原種のものであるが、数次の交配を経たものが使用され既に相応の期間を経過していることもあって、生育状況も安定している。その結果、同試験場には約2年間の寿命である母苗が300万株あり、年間3,000～4,000万株の子苗を生み出している。

しかし、軌道に乗っているように見える同植林事業ではあるものの、実は想定外の問題がいくつか生じている状況だと言う。

まず、当初は紙パルプ原料とするはずであったユーカリを、紙パルプ原料ではなく木材として販売しているようだ。なぜなら、当初想定していたよりも、施肥、除草、労務費、等のコストが嵩んでしまい、「林紙一体化」の本来の趣旨に合う形で紙パルプ原料として出荷するよりも、同地の好調な木材市況等を勘案した地場木材加工工場への木材販売を中心に操業している。足元では十分な採算性が確保されているこれら事業ではあるものの、比較的低コストで植林できた05年頃までの木材の出荷が終わり相対的にコストの高い木材の出荷が始まると同時に木材市況が追いついていないとすると、その時点での事業採算性はやや厳しいものとなる可能性もある。

また、中央政府の政策としては「林紙一体化」の掛け声のもと植林面積を増やす方向である一方で、外資による工場誘致等の商業的によりうまみのある用途での土地利用を推進したい地方政府の利害と相反する場合もあり、思うように植林面積を拡大できないと言う問題も発生している。

更には、商品価格が全般に強含みで推移する状況下、サトウキビの価格が上昇し生産者の利潤が大きくなっているため、植林地近隣の農民によって植林地が侵食されいつの間にかサトウキビ畑になっているという、にわかには信じられないような被害も頻発していると言う^(注3)。

視察させて頂いた同社としても、多くの選択肢の中から様々な検討を行った結果、「林紙一体化」の需要先となるはずであった大型製紙工場については、中国国内のより需要地に近い地域で建設し既に稼動を始めている。従つて、この自治区での植林事業については採算性は確保しつつも、ある程度は社会貢献事業的な意味合いも意識しながら行っている模様である。まさに、南国の太陽の下での長閑な事業のようでありながら、様々な経済的・社会的な矛盾・問題と対峙しながらこの事業は継続されていると言えよう。また、自治区中心都市でもある南寧市でさえも在留邦人は数十名（日系企業数は20社程度）という日本人にはなかなか馴染みの薄い土地で、10年近くも前から行っている息の長い同社による地道な取組みは、称賛されるべきであろう。

ところで、「林紙一体化」とは全く別の政策分野の話であるが、低所得者向け住宅（＝「保障性住宅」）の整備^(注4)は、本年から始まった第12次5カ年計画で最重要課題とされているにもかかわらず、思うように進んでいない。地方政府の税収の大半が中央政府によって吸い上げられてしまう財政構造のもと、土地使用権売却が公共投資等の主要財源となっている地方政府にとって、低所得者向け住宅に土地を提供するより商品性住宅を大規模に開発するデベロッパーに販売した方がはるかに有利なことが主因として指摘されている。また、2015年までに総延長1万6千キロの高速鉄道を開通させるインフラ整備計画の一環として、本年には北京上海線をはじめとして約5千キロの高速鉄道路線の開通が計画されていたが、北京上海線で頻発したトラブルや7月に浙江省温州市で発生し200人以上の死傷者を出した鉄道事故を契機に、開通スケジュールの延期や運転速度の見直しが行われている。

北京で生活する中で見聞きする様々な事象から、中国の国家としての大きな目標とそれを達成するための最適解の求め方の難しさを実感させられることは多々あるが、今般の視察によてもそれを再認識することとなった。

^(注1) 中国では紙類の生産に関して、供給サイクルが不安定で汚水等の環境汚染問題も深刻な藁やアシなどの非木材繊維のシェアが相対的に高く、これを漸減させかつ輸入木材パルプへの依存度も過度に上げないという趣旨で「林紙一体化」政策が採用されたという経緯がある。

^(注2) 国土の砂漠化を抑制するための環境保全のための植林事業という意味では寧ろ黄河以北の地域がメインとなっている。

^(注3) 葉の成分に青酸を含むユーカリの木だが、幹にナイフで傷を入れるだけで簡単に枯れてしまう性質がある。

^(注4) 12次5カ年計画期間中に全国で3,600万戸の保障性住宅を供給する計画で、2011年中の目標は1,000万戸。6月末時点での全国平均の「着工率」は56.6%とされているが、進捗状況に関して地域ごとのばらつきも大きい。